

序説・北海道社会事業史研究

三 吉 明

- 1 序
- 2 キリスト教の役割
- 3 社会事業家の系譜
- 3 公的社会事業の創設
- 結

序

わが国文化圏のなかに占める、北海道の位置づけについては、大きな役割を占めており、それぞれの研究分野においても、重要な課題である。

一方、わが国の社会福祉活動は、戦後著しい発展をみせている。あたかも戦後二十年を迎えて、その史的展開の研究考察は、先年来にわかに活発さを加えてきた。いうまでもなくそれは、社会福祉の対象と機能とを体系化するところの、学問的確立の要請に対応しようとするものであるといえよう。

たまたま北海道は、施設百年を迎えようとして、ここにもその回顧と反省とが、各方面それぞれの分野に、大き

序説・北海道社会事業史研究

な課題としてとりあげられようとしている。あたかもこの機会に、北海道における社会事業を、史的発展過程のなかで、捉まえてみようとするのは、非常に意義のあることだと考えたのである。

北海道社会事業の史的研究は、既にすぐれたいくつかの著作もあり、各地方の郷土史研究のなかにも、必ずそのことに、言及していないものはない。また、各種の社会事業施設においても、それぞれに沿革史を、多少なりともまとめてもっている。しかも社会事業創設期における、すぐれた人物も、現にまだまだ豊饒としておられるのである。

この機会にあたって、これらの史料を一貫した体系のもとに整理する作業も、また一層の意味があるろう。そして、わが国の社会事業史との対比のなかで、その位置を明らかにしてみたいというのが、この研究の態度であった。もちろん、そのためには、地域が広般であることから起る非常な時間と、労力と経費とを必要としたが、そのなかで、次の二つの方法を採用したのである。

即ち、社会事業史という独自の分野が、ある訳ではない。時には様々な用語をもって、経済史料のなかから、教育資料、宗教資料のなかなどに、広い分野にわたって発見することができる。それはむしろ、広く時代の国民生活史のなかから、社会事業という独自の概念が生成したことを発見することができるので、それらの資料を蒐集し、どこにどのような資料があるかを確めるという、非常に面倒な作業を、第一にとりあげた。

そのためには、札幌市内の公立図書館をはじめ、各大学附属図書館にある蔵書目録を中心に、資料の整理をおこなった。さらに函館市の図書館へも行った。ここには資料が豊富に、しかもよくまとめられていたからである。そのうえ、道内各地の各種社会事業施設へも、資料の照会をした。

この作業と併行しつつ、第二の方法は、主なる都市ごとに、社会事業関係者の座談会を開催してもらって、文献

などには表明されていない体験談などを、録音するという作業であった。予め十分に準備の打合せのうえ、札幌をはじめ根室、釧路、帯広、旭川、小樽、函館、室蘭の各都市へ出張した。

第一の作業は、文献、資料の所在を明らかにすることによって、関連資料との研究体系の明確化をはかり、第二の作業は、関係者の人物の系譜を正すのに、非常に役立った。つまりこの二作業によって、従来ともすると、歴史上の縦の関係にのみ重点がおかれやすい史的考察に対して、相互関連性の横の交錯、即ちどのように互いに影響し合ってきたかを、明らかにすることができたのである。

作業は現在まだ、ようやく資料の蒐集を一応終った段階に過ぎない。当然のことながらその分析、評価はさらに継続されるべきものである。

この研究には、昭和三十九年度北海道科学研究費の補助があったことを、感謝して附記する次第である。

1

北海道における民間社会事業施設として、第一に挙げるのは、なんといっても函館の育児講であろう。

函館戦争が終ってまもない明治二年（一八六九）六月、函館の町医榎山淳道は町の有志を説き、その協力によって育児講を結んだ。榎山はもと江戸にあって医業をつとめたが、墮胎を悪習として改むべきことを図り、諸国を遊歴してその防止につとめた。函館戦争の兵火のあとをうけて、生活に困窮した妊婦が、墮胎を希望したのを救おうとして、当時の富商杉浦嘉七らの協賛を得て結成したのが、育児講であった。その後、函館在勤の岡本大主典らによって、明治四年（一八七一）六月、函館育児会社と改められ、広く官吏や実業家等が、永続的にこれ

を援助する組織となった。開拓使も土地建物、事業資金などを下付して助成した。同十三年（一八八〇）には函館区に委管され、変遷を経て明治三十三年（一九〇〇）函館慈恵院の設立と共に、これに含まれた。¹⁾

この育児講と相前後して、作家吉川英治の小説「函館病院」で名を知られている実名の函館病院が、箱館在勤の官医栗本細堂と塩田順庵によって、細民施療をおこなっていた。これは明治九年（一八七六）以降は、一般の無料治療が廃止されたが、開拓使初期における医療保護事業として、見落してはならない。

明治期における社会事業施設は、²⁾

日本聖保禄会函館支部（明治十一年）

日本海員救済会（明治十九年）

札幌遠友夜学校（明治二十七年）

函館訓盲院（明治二十八年）

網走慈恵院（明治二十九年）

小樽孤児院（明治三十一年）

函館慈恵院（明治三十三年）

十勝自営会（明治三十七年）

札幌孤児院（明治三十九年）

小樽盲啞学校（明治三十九年）

函館助成会（明治四十年）

岩内救護院（明治四十一年）

北海道授産場（明治四十二年）

マリヤ奉仕会札幌天使院（明治四十二年）

函館共働宿泊所（明治四十三年）

旭川救護院（明治四十三年）

などを挙げることができる。

これよりさき、明治六年（一八七三）太政官布告により、キリシタン禁制の高札が撤去され、欧米の伝道師たちが来日し、盛んな布教活動をはじめ、その成果は驚異的なものであった。⁽³⁾ 北海道においても、函館をはじめ多数の外人宣教師が来道し、社会事業や教育事業を続けながら、活発な布教活動をおこなった。

たとえば明治六年、函館正教会のロシア宣教師アナトリイ司祭が、函館に伝教学校を設け、青森、秋田地方の信徒に、伝教師としての教育をしたのが、この種教育のはじめであり、まもなく、同教会のダミアン五十嵐が、伝教のかたわら女兒七、八名に読書、習字を教えたのが発端で、明治七年（一八七四）教会学校がはじまり、同十二年の大火後は三百人余の生徒を収容し、同二十一年（一八八八）まで続いた。⁽⁴⁾

明治九年（一八七六）札幌農学校（のちの北大）設立、クラーク (William Smith Clark 1826-86) が日本政府の招聘に応じ、北海道開拓の使命をおびて来日、同校の教頭をつとめた。在職中、北海道開拓使長官黒田清隆の反対を押しきって、聖書を全学生に配布し、キリスト教を教え学生に多大の宗教的感化を与えた。彼はアメリカの化学者、農学者、教育家で、八カ月の教育期間を終えて帰国するにあたり、ハイエスを信ずる者の誓約 V を作り、学生の署名を求めた（明治十年）。一期生十五名はこぞってこれに署名、また一期生の感化をうけた二期生十八名も署名した。帰国に際し、有名な *∧ Boys be ambitious ∨* の語をのこした。クラークの帰任後も、ハリス (Merriman Colbert Harris 1846-1921) の指導をうけた学生たちは、寄宿舎内で公然と礼拝を守った。これを札幌バンドと称する。このなからキリスト教界、学界の指導的人物が輩出した。⁽⁵⁾

英国聖公会宣教師協会宣教師バチェラー (John Bachelor 1854-1945) が、東洋での教育事業を志して香港に至ったが（明治八年）、マラリアに冒されて、療養のため函館に来たのが明治十年（一八七七）である。そしてその生涯をアイヌの教化と研究にささげた。

明治十一年（一八七六）五月二十八日、サルトル聖ポロ修道女会のマリ・オグスト、マリ・オネジム、カロリンの三名が、極東地区の神父の要請によつて函館に来て、元町三七番地に事務所を設け、孤児貧児を收容して教育をはじめた。人がんがん寺のヤケドの薬Vは、人ビルジンさまの膏薬Vとして、有名であり、函館市民の子どもで、その恩恵に浴さないものはないとさえいわれている。

明治十九年（一八八六）には聖保禄女学校が開校され、同二二年（一八八九）には小学部が開校された。

当時のわが国において女子教育は、男子の教育よりもおくれていた。ここに着目して、外人宣教師が、北海道女子教育の先駆者となつたのである。これら初期の私立学校の中で、特に注目されるのは、宗教団体の設立による学校が十校もあり、ことにキリスト教系の学校が七校もあることである。(6)

名称	宗派	創立	設立者	参考
遺愛女学校	米、メソジスト	明一五	ミセス・カロライン・ライト	明治七年ハリス夫人が塾式教育をはじめた
正教女学校	露、ハリスト	明一七		明治六年伝教学校開設、廃止年月不明 明治一一年マリ・オグストほか二名が孤児 施療をはじめた
聖保禄女学校	仏、天主教	明一九	マリイ・オグスト	明治二二年塾式教育、二七年北星女学校に 改称
スミス女学校	米、北長老会	明二二	ミス・サラ・クララ・スミス	明治一八年釧路女学校と改称三一年廃止
釧路英和女学校	英、聖公会	明二二	ウオーターアンデレス	明治四二二年大火焼失廃校
靖和女学校	右 同	〃	〃	明治二七年ロース女学校 二九年改称
静修女学校	米、北長老会	明一九	ミス・クララ・ロース	

明治二十年前後までのキリスト教系学校は、ほとんどが英語（または仏語―聖保禄）、音楽、裁縫など少数科目の教授であったが、二四、五年ごろからは、修身（聖書講義）、国漢、代数、幾何、図画、英語と学科目を増し、

ことに音楽と英語には力を入れ、キリスト教系学校の特色として現在に至っている。

バチエラーの本職は聖公会の宣教師であるが、アイヌが和人に圧迫され、しかも非文化的な生活で、次第に滅亡するのを憂え、明治二十一年（一八八八）幌別村に愛隣学校を開き十五人のアイヌ児童と一人の和人児童を收容し、校長には金成太郎が就任した。ここではアイヌ語の読み書きをローマ字で教えた。しかし同二六年頃には廃校となった。

バチエラーは、さらに教会付属機関として明治二五年（一八九二）函館にアイヌ学校を設け、聖公会のネットルシツプが校長となり、小学課程でローマ字、聖書を教えた。ネットルシツプはさらに伏古にも学校を設け、明治三二年（一八九九）には附属育兒院に、児童十四人を收容していた。

バチエラーは明治二六年（一八九三）札幌に移り、アイヌ語研究と布教を続け、日高、釧路方面にも出かけ、平取に教会堂を建て、教育所とした。この教育は同四二年（一九〇九）、官立元神部小学校ができるまで続いた。また明治三一年（一八九八）新冠村に講義所を設け、アイヌの教育をおこない鈴木正彦が指導に当った。同三六年（一九〇三）には、アイヌのために官立の姉去小学校が設けられたが、かえってこの私学に通うものが多かったという。しかし同三八年（一九〇五）には姉去小学校へ引継いで廃校した。

彼は晩年、宣教師退職後、アイヌ保護の学園としてバチエラー学園を設けた（大正十三年）。全道各地からアイヌの子弟を札幌市北三条西七丁目の自宅へ集め、寄宿舎をもかね生活費、衣服費一切を彼が負担した。昭和五年（一九三〇）財団法人となり、新渡戸稲造ら当時の著名人が、この事業を積極的に後援した。

バチエラーは和英アイヌ語辞典を編さんして、世界の言語学界に不朽の名を残したばかりでなく、旧土人保護法公布（明治三二年）の蔭の力となった。六十年間のアイヌ教化の功績が認められ勲三等瑞宝章が贈られたが、ルイ

ザ夫人の死と戦争のため、昭和十七年（一九四二）日本を去り、パチエラー学園も廃止となった（この建物は昭和三十六年北大植物園に移され記念館となっている）。二年後にイギリスで九十一歳の生涯を不遇のうちに終った。

明治二十三年（一八九〇）九月、イギリス人聖公会婦人伝道師ペインは釧路へ来て、アイヌを集めて伝道したが、翌年二月二四日、春採土人学校を開校した。またこの年七月、パチエラーの義兄アンデレスの尽力で、上湯川小学校から永久保秀二郎を教師として迎え、道庁の規程による小学校として認可された。永久保は、アイヌ教育に全力を注ぎ、入浴を嫌う子どもたちを、自ら抱いて風呂に入り、恐しくないことを自覚させたり、手拭いの使い方を教えたりした。

アンデレスは同二二年釧路英和女学校を開き、ペインはこの主任教師となった。つづいて同二八年（一八九五）に標茶の塘路に、アンデレス、ペインらによって塘路土人学校を設けた。これはのちに公立塘路簡易教育所となった。さらに同三十年（一八九七）には白糖土人学校が設立され、ペインこはこれらの学校を巡回して指導に当たった。

明治二十九年（一八九六）十一月、教師ヤコブによって幕別に白人アイヌ学校、別名耶穌学校が開校された。⁽⁷⁾ こうした外人伝道師による教育事業は、この時代においては社会事業の一分野として、国あるいは道の旧土人教育政策に、より積極さを与える誘因となり、明治三二年（一八九九）の「北海道旧土人保護法」の設立によって、国費による施策が実施されるようになったのである。

北海道における教誨事業は、明治十一年（一八七八）札幌中教院の小松万宗が最初であろう。⁽⁸⁾ さらに明治十四年（一八八一）に東本願寺札幌事務出張所が教誨堂を建て、札幌監獄本署の教誨事業をおこなっていた。

クリスチャンとしての原胤昭が、釧路集治監の教誨師として、神戸から囚人の引率者となって赴任したのは明治

二一年（一八八八）であった。原は同じくクリスチャンの大井上典獄とともに金森通倫、小崎弘道の斡旋で、主として同志社、青山学院の出身者を北海道に招いた。即ち留岡幸助、松尾音次郎、末吉保造、大塚素、阿部政恒、山本徳尚、中江旺、牧野虎次、水崎基一、それに生江孝などがいた。(6)

留岡幸助が丹波教会を辞して、北海道空知集治監そらちの教誨師となったのは明治二四年（一八九一）彼が二七歳のときである。東京巢鴨に家庭学校を創立し、非行少年の感化事業を始めたのは明治三二年（一八九九）であり、北海道遠軽社名淵えんがるに、その分校を設けたのは大正三年（一九一四）であった。(6)

明治三七年（一九〇四）東本願寺は、全道監獄に専任教誨師を派遣し、その後永く、教誨事業は、彼らの手によっておこなわれるようになった。

これらの教誨事業と関連して、民間人のなかに免囚保護事業に働くものもあった。留岡幸助によって、霊南坂教会において受洗した平信徒の一人本間俊平は、山口県秋吉において、長門大理石採掘所を開設し（明治三五年）、免囚保護、感化事業をおこなっていた。(6) そこで教導をうけた一人である相川勝治は、恩師本間俊平にならって、北海道にわたり、原野の開墾をおこないつつ、網走刑務所の出獄者のために、サロマ湖畔富武士とつぶしにおいて、自邸を開放して保護をおこなった。

大正三年、相川勝治氏免囚保護事業として、二六〇丁歩の土地の払下げを受け、博愛職工学会を組織し、高橋茂一氏を指導員として刑余者十五名を引率し入地するに及び、開拓は俄に進んだ。この学会は世上色々取沙汰されたが、相川勝治氏死亡した後、大正十四年解散に至るまで、当部落開拓のために残した事績は少くない。(6)

佐呂間村史、昭和二四年刊)

この相川を助け、直接に教化指導の任に当たったのは、山口庄之助牧師（明治三二年明治学院神学部卒）であった。これはキリスト教徒が、全道各地の農村開拓伝道をおこなったその具体的な事例の一つに過ぎないが、牧師のみならず平信徒による、社会事業社会教化活動の功績も、また見落してはならないものがある。

註

- 1 「札幌市社会福祉の歩み」札幌市民生事業助成会 昭和三十四年刊
- 2 野村琢民編「北海道社会事業団体誌」北海道社会事業協会 昭和二十六年刊
- 3 久山康編「近代日本とキリスト教」明治篇 基督教学徒兄弟団 昭和三十六年刊
- 4 「函館市史資料集」第二五集
- 5 「キリスト教大事典」教文館 昭和三十八年刊
- 6 「北海道私学教育史」北海道私学協会 昭和三十八年刊
- 7 同右
- 8 「札幌市社会福祉年表」札幌市 昭和三十四年刊
- 9 若木雅夫著「原胤昭」渡辺書房 昭和二十六年刊
- 10 留岡清男著「教育農場五十年」岩波書店 昭和三十九年刊
- 11 三吉明著「本間俊平伝」新約書房 昭和三十七年刊参照

2

社会事業の施設が、どのように伝承されてきたかを知るとは、社会事業発展史の研究において、重要な意味をもつものである。

例えば血縁関係、特に父子、夫婦に伝承されたものとして、創設者の意図が十分に伝えられるという場合は、決

して少くない。

明治三十七年（一九〇四）篠崎清次郎の函館盲啞学校、同三十九年（一九〇六）小林運平の創立による小樽盲啞学校をはじめとして、大正元年（一九一二）助川貞次郎の札幌記念保護会は、釈放者保護事業を始めたが、後に大化院（大正四年）となり今日に及んでおり、同じく大正二年（一九一三）の愛隣会（札幌）は、岩井鉄之助によって始められ、大正三年（一九一四）遠軽社名淵しやなぶちの家庭学校（感化教育）は留岡幸助の創設であり、大正十一年（一九二二）大石スクによる札幌保育園（豊平六ノ三）や昭和二年（一九二七）内田悟による釧路養老園などは、すべて親子の継承で今日に及んであり、大正七年（一九一八）札幌報恩学園は、小池九一によって感化教育事業として始められたが、現在は妻小池スミを代表者として、精薄児施設となり、同じく小池国雄が富ヶ丘学園（精薄児施設）を昭和二四年（一九四九）に始めたなどの場合もある。

また創設当時から企劃に参加するか、または協力者として同志的結合のものへ継承された例もある。明治二七年（一八九四）新渡戸稲造によって創設された札幌遠友夜学校が、①半沢洵に引継れており、明治四三年（一九一〇）函館共働宿泊所が、仲山与七より越前金一郎へ引継れて今日に至っているなどである。

さらに事業を継承したものとしては、先に述べた函館育児会社が、函館慈恵院（明治三三年）となり、函館厚生院（昭和二一年）となって、実に九〇余年の歴史を伝承しており、②小樽孤児院（明治三一年）もまた、小樽育成院（明治四三年）となり、今日では養老事業のみを伝承している。③また明治三十九年（一九〇六）札幌孤児園が、札幌育児園（明治四三年）となり、昭和二〇年（一九四五）に興正学園（秦元勝）を分離した例もある。

明治四二年（一九〇九）創設のマリア奉仕会天使院（病院）が、大正十二年（一九二三）に育児部を、昭和二年（一九二七）授産部、昭和十五年（一九四〇）には産婆講習を開講するなどのことを経て、今日は広島村に育児部

をもち（昭和五年）、養護施設として存続している。

明治二八年（一八九五）四月、函館駐在のアメリカメソジスト派宣教師ドレーパーの母マイライネ・ドレーパーが、函館訓盲会を設け、盲人に点字、按摩を教授した（青柳町五二）。彼女はすでに明治二二年（一八八九）横浜において、盲人福音会を組織し、明治二四年（一八九一）横浜訓盲院を開設、盲人教育を実施した経験をもっていたのである。^④ 函館における第一期生のなかに篠崎清次がいた。明治三四年（一九〇一）ドレーパー函館を去り、この機会に函館訓盲院と称し、翌年啞生部をおき、その経営はアメリカ在住匿名婦人団体にゆだねられ、ワドマンが院長となった。同三七年（一九〇四）には篠崎清次が院長に就任した。同四五年（一九一二）函館盲啞院と改称し、大正三年（一九一四）からは独立経営となり、非常な困難のなかに今日に継承されたのである。なかでも篠崎が直接指導をした一期生の一人辻本繁は、昭和三年（一九二八）十一月、八雲聾啞学院を創設、さらに室蘭に移って、ここに聾啞学院を開いた。昭和二三年（一九四八）十月をもって、盲聾啞教育が公私立とも道立に移管されるに及んで（函館盲啞院は昭和二二年函館市立）、昭和二四年、室蘭言泉寮として、ろ、ろ、あ児施設となり（母恋、南町）、七〇名を収容している。^⑤ いわば師弟の伝承の美しい姿をそこにみることができるのである。

北海道における少年教護事業は、明治四一年（一九〇八）十二月、札幌郊外藻岩山麓に建設された庁立札幌感化院に始まり、主事に小池九一が任命された（明治三三年感化法、同三四年施行細則、同四二年設立国庫補助）。

これよりさき、明治二八年（一八九五）フロレンス・シンガーによって函館訓育会が設立されていたが、同四五年（一九一二）イギリス宣教師ミス・タブソンらによって財団法人函館訓育院と改称し、実業界の長老渡辺熊四郎が院長となり、東京家庭学校長留岡幸助に依頼し、優秀な主任職員として、同校幹事錦古里忠次を主事として迎えた。大正十三年（一九二四）四月、北海道庁立大沼学院となり、札幌学院長福原丞三郎が院長に着任した。^⑥

大正三年（一九一四）留岡幸助は家庭学校社名淵分校を開設、「能く働かせ、能く食わせ、能く眠らせる」という三能主義に立って、教育と宗教とを指導の心構えとした。この留岡と小池とは深い親交をもち、留岡が東京と往復の途次には小池宅へ立寄るのが常であった。その影響もあって、大正七年（一九一八）十一月、小池は札幌学院長を辞任して、札幌報恩学園の私設経営に専念することとなったのである。その頃の留岡、小池往復文書は、今もなお小池家に保存されている。

また昭和二六年（一九五一）児童福祉法による道立教護院（男子）として日吉学院が、函館市内に設立されるに当っては、国立武蔵野学院長青木延春が、実地踏査して用地を決定するなど、その指導をうけている。今日においては大沼に中学一年以下を、日吉に中学二年以上を分類収容している。（？）

註

- 1 半沢洵編「札幌遠友夜学校」同会 昭和三九年刊
- 2 阿部竜夫著「函館厚生院六十年史」同院 昭和三五年刊
- 3 興水伊代吉編「小樽育成院三十年誌」同院 昭和三年刊
- 4 三吉明著「基督教社会事業史」敬文堂 昭和三五年刊参照
- 5 北海道民生部編「道内社会福祉施設一覽」 昭和三九年刊
- 6 全国教護協議会編「教護事業六十年」 昭和三九年刊
- 7 右 同

3

以上個人または法人が社会事業施設を開設した経過を中心に述べた。しかし伊藤一隆らが禁酒会を創設して、矯

風運動を展開しつつ、明治二四年（一八九一）にアイヌ矯風部を設置し、あるいは片山潜が札幌に来て、明治三二年（一八九九）共働店の設立を指導し、⁽ⁱ⁾ さらに基督教婦人矯風会支部が、昭和一五年（一九四〇）に、その本来の活動の必要から旭川隣保会の託児事業、母子寮を指導したなどの例も随所にみられるのである。

わが国の社会事業の発展史のみではなく、近代社会事業は民間社会事業の、慈善の具現として台頭したことは明らかである。しかしそれはやがて、民間社会事業の及ばざるところを、公的機関がより強力に、制度化する傾向を生じ、同時に慈善事業から社会事業への思想的展開をもたらした。そしてそれは、全国一斉に一律に、国民を対象とする事業へと進展をみせていくのであるが、その初期において、いわば地方分権の勢力範囲のなかで、公的社会事業に、地方的特色的配慮による施設はなかつたろうか。いわば公的社会事業としての特色に、みるべきものとしてはどんなものがあつたかを考察することも、また重要なことであろう。すなわち、北海道開拓期における公的社会事業は、そのみで十分に研究に値いするものがあると思われるのである。

例えば、明治二年（一八六九）開拓使（開拓使長官鍋島直正、開拓長官東久世通禧、開拓判官島義男）は、函館市内に免税の措置をとり、箱館戦争のため戦死した遺族の救護、及び士籍を脱して帰農するものに、保護を加えた。特に開拓使病院規則を定めて、救恤第一義としたなどがそれである。⁽²⁾

また明治四年（一八七一）太政官達による棄児養育米給与方に先立って、明治三年（一八七〇）開拓使は、困窮する旧土人（アイヌ）の出生児に、五カ年間養育料を給し、また妊婦の使役を禁じている。さらに同年募移民規則が定められた。

明治七年（一八七四）太政官達「恤救規則」が定められ、これは実に五六年間の永い間、わが国唯一の救護立法であつたわけであるが、この年、屯田兵例規が定められ、翌年には札幌郊外琴似^{コトシ}に、最初の屯田兵村の入植がおこ

なわれた。

このように、北海道における公的社會事業は、わが国の他地域に例をみない開拓開墾入植という事業と、旧土人すなわちアイヌの保護ということから始められたところに、その特色をみる事ができる。

当時の北海道は、対ロシア関係の接点であり、その脅威が明治八年（一八七五）千島樺太交換により、北方の國境が確定するまでは、明治政府にとり最大の外交、国防問題であったことは事実であり、そのため開発が急がれたのも事実である。また農業開発に必要な移民は、急速に十分に得ることができず、政府は強力を用いて屯田兵政策をとるにいたった。その一面、開拓使の藩閥官僚と特殊な政商、財閥とのからみあいも成立していき、日本本土の原始的蓄積がおわり、資本が次第に北海道に進出してくるようになって、ようやく開拓使の歴史的使命が終了するのである。(3) それが明治十五年（一八八二）で、札幌、函館、根室の三県制が成立する。そして開拓使管理の諸工場、煤田鉄道が工部省に、殖民事務、山林事務、札幌畜種場、製煉場、博物館、製網所、製粉場、札幌緬羊場、麦酒醸造所、葡萄酒醸造所、ホップ園、桑園、札幌陸運事業、札幌紡績所などが農商務省に転轄となったのである。明治十九年（一八八六）ようやく北海道庁が設置され、土地私下規則、官営諸工場農牧場等の私下、貸付処分方法が決定し、道路開さくがはじまった。(4)

ここに自然移民の流入ばかりをまわっているわけにいかないので、強制労働力の移入がはかられ、その第一が囚人労働であった（明治十四年樺戸集治監、同十五年空知（市来知）、同十八年釧路、同二十四年網走分監、同二十八年十勝分監設置）。かくして囚人は石炭、硫黄の採掘、精煉、道路、河川工事、屯田兵屋の建設など、最も早いのは幌内炭坑（明治十九年〜同二十七年）各年六百ないし千人前後に達し、道路工事では明治二〇年（一八八七）岩見沢・滝川間を樺戸の囚人が、忠別太・網走間を釧路の囚人約八百人が、四〇余里を半年で完成するなど、そこには随分悲

惨な記録さえみられる。また屯田兵の場合も根室和田村、厚岸郡太田村、輪西村などに入った屯田兵史上、「最も悲惨をきわめた部隊」もあつたのである。しかしさらに残酷を秘めたものに土工部屋（たこ部屋）、鉾山の納屋制度、漁業の労働者などが広く存在した。しかもこのような封建的労働組織の背後に、今日の暴力団すなわち博徒の地下組織があつて、これを補強していたことも、見逃してはならない。⁽⁵⁾

この時期に、新渡戸稲造が札幌に出獄人保護会を結成（明治二三年）し、関場札幌病院長がアイヌ治療病室（明治二五年）を経営したのに対して、道庁が自ら移民保護規則を定めたのは、明治二七年（一八九四）であり、北海道旧土人保護法が公布されたのは、その五年後である。社会事業の施設としては感化院（明治四一年）が最初であり、翌年授産場が設置された。道庁としては、もっぱら、大火の救済や天災凶作の応急救助に追われている有様であつたのである。

岡山県に済生顧問制度が実施（大正六年五月）され、東京府に救済委員、大阪府に方面委員（大正七年）が設置され、札幌にも札幌区窮民救助規程（大正八年一月）が制定された。内務省の救護課がようやく社会課（大正八年十一月）と改称され、それが社会局（大正九年八月）となるに及んで、⁽⁶⁾ 道庁にも社会課が新設されたのは大正十年六月である。そして北海道庁が保導委員規程を制定して、札幌に三四人を選任したのは大正十一年（一九二二）であつた。

北海道が、他の地域と大いに異なるところの社会問題を内蔵しておりながら、その地域性、特殊性が、常に中央依存の政策に頼らねばならなかつたといふところに、問題があるように思われるし、そのことについて一層の研究がなされねばならない。

- 1 渡辺惣蔵著「北海道社会運動史」白都書房 昭和二十四年刊
- 2 平田平五郎編「函館公立病院開業」同院 明治十一年刊
- 3 奥山亮著「北海道史概説」みやま書房 昭和三十三年刊
- 4 橋本堯尚編「北海道史年譜」橋商会 昭和二十四年刊
- 5 戸崎繁著「監獄部屋」北海道労働協会 昭和二十五年刊
- 6 三吉明著「社会事業講義」敬文堂 昭和三十一年刊参照

結

ここにはわずかに、北海道社会事業の初期における概況を、一瞥したにすぎないが、北海道社会事業の占める重要な諸点を、多少なりとも明らかにすることができたと思う。

その特色の第一は、キリスト教による影響である。外国宣教師はもちろん、多くのキリスト者によって、まず民間社会事業が始められた。このようなことは、わが国の他の地域（岡山、熊本、静岡など）においても、その例がないわけではない。しかし北海道ほど広く、各分野各階層に及んで、しかもそれにつづく人々のなかにも、キリスト教主義に感化影響されたものが、これほど多い地域はないように思われる。しかし、それが直ちに札幌バンドのもつ指導性に結びつくかどうかは、さらに研究を要する点であろう。

第二は、アイヌという他地域にはみられない、社会事業対象客体をもっていたことである。そこに特別な、いくつかの施策がみられるのは当然なことである。

そして第三には、北方パイオニアに関連するところの、いくつかの課題である。むしろ北海道社会事業の特色は、ここにあるといえよう。たしかに開拓使期においては、次々と新なる事態に対応する処置が、とられざるを得

なかった。それは先に述べた通りである。しかしそれが、北海道庁時代になると、そこに公的社會事業の台頭がみられるが、もはやそれは、中央依存の行政があるにすぎない。それは天災地変、冷害などによる救済策に迫られるだけであつて、岡山県の済生顧問制度や、大阪府の方面委員制度のような独創的な何ものもみることとはできないのである。特に冬季失業者の街頭に浮浪するのは、寒冷地につきものであるにもかかわらず、その救済は民間人の篤志家に依存していた。アイヌの問題についても、中央からの遠隔操作に頼るばかりであつた。最も悲しいことには、土工部屋の解決にさえも、中央職業紹介事務局（東京）の指導にまたねばならなかつたのである。(1) そしてそれは、近年においてもなお同様な現象がみられる。

例えば昼間里親制度や老人年金制度(2) はついに実らず、「心の里親運動」は花々しく喧伝されながらも、本格的な里親制度は非常に立遅れているなどがそれである。(3)

そこには、北海道が土台石を置かない住宅とトタン屋根に象徴されているように、一擲千金の出稼ぎ根性であり、ヤン衆（出稼漁夫）文化にすぎなかつたからであらう。つまり腰を据えて土着化する文化の建設が実らず、俗にいう「東京都札幌区」と称することに迎合し、札幌チョン（札幌チョンガー）が羨望視されるような精神的風土の影響ではなからうか。たしかに札幌市の都市計画が、百年前の文化遺産にあぐらをかいて、そこには未だそれ以上の雄大な構想は、みるべくもないということ、悲しむべきことといえよう。

北海道が特有の社會問題を内蔵する地域でありながら、社會事業の發展過程のなかに、それらを解決する抜本的な、独特な創造的施策がなにもみられず、単に民間人の開拓精神の具現ともいふべき、善意と財力に依存してきたところに、北海道社會事業の姿があるように思われてならない。われわれは、このような歴史的過程のなから、遅しい意欲を振り起すとともに、今後の方向を正しく理解しなければならぬと、考えるのである。

註

- 1 「移動労働を顧みて」東京地方職業紹介事務局 昭和三年刊
- 2 三吉明「停年退職金制と老人福祉に関する一試論」明治学院論叢第四八号 昭和三三年参照
- 3 三吉明編「里親制度の研究」日本児童福祉協会 昭和三八年刊参照